

《人生の大切な優先順位》

説教者: 郑南哲牧師

聖書箇所: ルカの福音書 10章38~42節

1. 「忙しい」があいさつになっている時代(忙しい時代、忙しい人々、忙しいクリスチヤン)

愛する兄弟姉妹の皆さん。最近、人に「お元気ですか」「どうしていますか」と聞くと、ほとんど決まり文句のように返ってくる答えがあります。「いや~、まあ、忙しいですね。」「バタバタしています。」学生も、社会人も、親も、そしてクリスチヤンも、教会も、みんな忙しい時代です。教会を見ても同じようなところがあるでしょう。礼拝、クリスマスイベント、牧場、アワナ奉仕、食事の準備、受付や案内、賛美、食事やお茶の用意、清掃、会計、事務、片付けなど…。実は日頃目立たないところでよく奉仕をし、仕え、動いてくださる尊い奉仕者の方々のおかげで、教会は本当に支えられています。教会の尊い奉仕者のみなさんに心から感謝致します。

しかし、もしかすると、奉仕者の中にも「自分はちょっと今日の御言葉に書かれているマルタに似ているな」と感じる方が多くおられるかもしれません。実は牧師夫婦や牧者ははじめ、教会で家の教会の牧場で、奉仕を多く、熱心にする方々の中でもっとマルタのように思われる方々が多いでしょう。

だれよりも礼拝や牧場の前に早く来て準備をしたり、家の片付け、掃除などで忙しくなり、礼拝や牧場が終わった後もみんなが帰ってから最後まで残って片付けたりする方々もマルタになれる可能性が高くなるかも知れません。クリスマスが近づくとさらに忙しくなるので、アドベント1週目の礼拝に我らがともに今日の御言葉を大切に心に留め、覚えて頂きたいと願います。

主の為、主の教会の為、兄弟姉妹の為のその奉仕は、主の前に間違いなく尊く、大切で必要なものです！間違つて解釈してはいけないことは、今日のイエス様も決してマルタに奉仕に関して指摘されたわけではありません。いつの間にか本来の愛の動機と目的マルタの心から変わってしまっているところを指摘し、教えて、優先順位の正しく見直して下さる御言葉であることをまず覚えて頂きたいと願います。

ある意味で奉仕者の心のどこかでマルタのような思いが湧いてくることはないでしょうか。

「どうしていつも私ばかりが大変なんだろう。」「あの人はどうしていつも座っているだけなんだろう。あの人は座っているだけで、どうして手伝ってくれないんだろう。」「神様は、私のこの働きを本当に見ておられるのだろうか。」

今日の本文に登場する **マルタ** は、まさにそのような人でした。イエス様を愛し、イエス様の為に家を開き、愛を持っておもてなしの奉仕に立っていましたが、その奉仕する彼女の心がいつの間にかイエス様は忘れて、失ってしまい、忙しさ、人への比較、不満へと変わっていきます。

今日はこの物語を通して、① マルタから学べる点、② マルタから気をつけるべき点、③ イエス様がほめられたマリアの選び、この三つを見ながら、私たちの「優先順位」をもう一度見直し、整えたいと思います。

2. マルタから学べる点 ー もてなしと責任ある奉仕

まず、マルタを一方的に批判してはいけません。イエス様は今、エルサレムへ向かう道、十字架の道、苦難の道を進んでおられます。その道の途中で、マルタは自分の家を開き、主をお迎えしたのです。

今日の本文**38節**にはこう書かれています。「さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人が**イエスを家に迎え入れた。**」:ヨハネの福音書11-12章に出るベタニア(エルサレムから東側3km、オリブ山の向こうの町である)のラザロの家(マリアとその姉妹マルタの村であった)

「**迎え入れた**」という言葉には、喜んで、心からもてなしたというニュアンスがあります。昔日本もそうですが、古代ユダヤ人社会でお客様を家に迎え入れ、おもてなしすることはとても大事な美德であり、風習であった。

今イエス様はエルサレム、十字架へ向かう旅の途中でした。そのイエス様を、自分の家にお迎えする。当時のユダヤ社会で誰かを家に迎えるということは、単なる礼儀ではなく、**安全・財産・労力・時間を差し出す決断**を意味しました。安全や時間や財産をも差し出す行為でした。

また、**40節**には「マルタはいろいろな もてなしのために心が落ち着かず」つまり、マルタは、一人でもてなしのために多くのことに心を取られていたことが分かります。実際にずっと立って動き周り、料理を作り、席を整え、もてなし

の働きをしていたのはマルタでした。

今日の教会に当てはめてみると、このような方々のおかげで礼拝が進み、食事ができ、行事が成り立っています。

人目につかないところで、名前もあまり知られない場所で、黙々と動いておられる「マルタのような手」があるからこそ、教会は実際に機能しているのです。

もう一つ、マルタから学べる点があります。心に不満や寂しさが溜まったとき、彼女はどうしたでしょうか。

「主よ、妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。」(40節)

マルタはその感情を イエス様のもとへ持つて行きます。他人の陰口を言ったり、裏で愚痴をこぼすのではなく、主のもとへ出て行き、率直に話します。

もちろん、その言葉のニュアンスには不平が含まれています。しかし同時に、心の本当の状態を主に打ち明ける祈りの姿もあります。

愛する皆さん、マルタには、イエス様への もてなしの心、具体的な奉仕、そして 主の前に心をさらけ出して祈る姿勢 という意味で、確かに私たちが学ぶべき点があります。

問題は、その奉仕が彼女の心の中でどのように変質していったのか、ということです。

もう一つ、マルタから学べる点があります。心に不満や寂しさが溜まったとき、彼女はどうしたでしょうか。

「主よ、妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。」(40節)

マルタはその感情をイエス様のもとへ持つて行きます。他人の陰口を言ったり、裏で愚痴をこぼすのではなく、主のもとへ出て行き、率直に話します。もちろん、その言葉のニュアンスには不平が含まれています。しかし同時に、心の本当の状態を主に打ち明ける祈りの姿もあります。

愛する皆さん、マルタには、イエス様への もてなしの心、具体的な奉仕、そして 主の前に心をさらけ出して祈る姿勢 という意味で、確かに私たちが学ぶべき点があります。まとめると、マルタからは

- ・ 自分の家と持ち物を開く もてなしの心
- ・ 実際に動き続ける 責任ある奉仕
- ・ 不満さえも主の前に持つて行く 正直な祈りを学ぶことができます。

しかし、問題は、その奉仕が彼女の心の中でどのように変質していったのか、ということです。

3. マルタから気をつける点： 忙しさと比較、不満、支配された心、主を自分の味方」にしたくなる心 (愛の動機・奉仕の目的であったキリストを失う)

イエス様はマルタに向かって、このように言われます。

「マルタ、マルタ、マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思ひ煩って(心配して)、心を乱しています。」(41節)

ここで主が指摘されたのは、「奉仕という行為そのもの」ではありません。むしろ、その奉仕のゆえに心が騒ぎ、引き裂かれてしまった状態です。主が問題にされたのは、「奉仕そのもの」ではありません。奉仕のゆえに、心が引き裂かれ、騒ぎ、疲れきっている状態です。思ひ煩う(心配する：'メリムナオ'(ギリシャ語)=分ける(メリゾ)+心(ヌス))

聖書は「心が落ち着かなかった」(口語訳では「心を騒がしていた」と表現します。この言葉には、「四方八方に心が引っ張られ、心があちこちに分かれてしまう」というニュアンスがあります。

奉仕そのものは良いことでしょう。しかし、その奉仕のために

- ・ 神様を、主イエスキリストを見上げる目と愛が曇り、
- ・ 喜びが失われ、

- ・ 平安がなくなり、
- ・ 人への比較と不満ばかりが溢れてくるなら、

その瞬間から、奉仕はもはや信仰と愛の実ではなく、自分の心をすり減らす重荷になってしまいます。

1)奉仕が比較と不平に変わるとき

マルタはこう言います。「主よ、妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。妹におっしゃって、私を手伝うようにしてください。」(40節)

最初は「主のために」と始まった奉仕が、いつの間にか心の中で「なぜ私だけが?」「なぜあの人は?」という思いに変わっています。

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちの内側にも、このような瞬間はないでしょうか。

- ・ 教会で奉仕をしていて、
- ・ 家庭で犠牲を払っていて、
- ・ 共同体のために尽くしているうちに、ふと気がつくと、

「なぜいつも私だけが、こんなに大変なのだろう。」「どうして私はいつも立っていて、あの人はいつも座っているのだろう。」そんな思いが沸き上がることがあります。そのとき、私たちの視線はすでにイエス様ではなく、人のほうに向いてしまっているのです。

2)イエス様を自分の側に引き込もうとするとき

マルタはイエス様にこう願います。「主よ、妹におっしゃって、私を手伝うようにしてください。」

この言葉の奥には、次のような心が潜んでいます。「主よ、私の考えが正しいと認めてください。私のやり方が正しいと保証してください。そしてマリアを動かしてください。」

私たちも祈るとき、似たような姿勢をとることがあります。

- ・ 「主よ、この人の心を変えてください。」
- ・ 「主よ、私が望むように状況を動かしてください。」

* 祈りが神の御心を求める場所ではなく、自分の願いを神に通そうとする場所になってしまう危険があります。

イエス様はそのマルタに対して、愛をもって、しかしあくまで語られます。

「マルタ、マルタ…。」まるでこうおっしゃっているかのようです。

「マルタ、あなたの心がどれほど疲れているか、私は知っている。しかし、今本当に必要なのは、この問題をどう解決するかではなく、あなた自身がもう一度、私の前に座ることなのだよ。」

4. マリヤの選び — 奪われない「良いほうの分」、ただ一つ必要なこと

それでは、マリアの姿に目を向けたいと思います。

39節にはこう記されています。「マリアは主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。」

「足もとにすわる」という表現は、当時、ラビの教えを受ける男の弟子たちの典型的な姿勢を表す言葉であります。マリアは、女性でありながら、イエス様の弟子として、御言葉に聞く座を選び取ったのであります。

そして42節で、主は次のように言われます。

「しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはあります。」

「良いほう」とは、「分け前」「受ける取り分」という意味を含む言葉であります。

すなわち、マリアはイエス様ご自身と、その御言葉を、自分にとって最高の「取り分」として選んだのであります。家事やもてなし、さまざまな活動は、必要なことあります。しかし、それらはすべて、時が来れば終わるものであります。

一方、主の足もとで御言葉に聞き、主との交わりの中で与えられる慰めと導き、信仰の成長は、決して取り上げられることのない、永遠に残るものであります。

イエス様は、決して「働くな」「何もするな」と言わされたのではありません。

「多くのこと」よりも「ただ一つ、本当に必要なこと」に、まず心と時間を向けなさいと教えておられるのであります。

5. 結論 一 多くのことには追われながらも、一つを選ぶ

最後に、まとめたいと思います。マルタは「悪い人」ではありません。ただ、方向と優先順位がずれてしまった人です。イエス様はそのマルタに向かって、「マルタ、マルタ…。」と、愛をもって呼びかけられました。そして、心の中心をもう一度ご自分のほうに向けるように招いておられます。

今日、主は私たちにも語っておられます。

「〇〇よ、〇〇よ、あなたはいろいろなことを心配して、気を使っている。」

- ・ 私は今、何のためにこんなに忙しくしているのか。
- ・ この忙しさは、主に近づけているか、それとも 主から遠ざけているか。
- ・ 今日、主の前で手放すべきものは何か。そして、**もう一度しっかりと握るべき「ただ一つ必要なこと」**は何か。

愛する皆さん、マルタのように熱心に仕えつつも、マリアのように主の足もとに座る弟子として、この一週間を、主とともに歩んでいきたいと思います。マルタのように、主のために熱心に仕えつつも、マリアのように、主の足もとに座る時間を大切にする。そのようなバランスの取れた弟子として、今週も歩んでまいりたいと願います。

(祈り)

恵み深い天の父なる神様。私たちの内にあるマルタとマリアの姿を、きょう、みことばを通して見せてくださいありがとうございます。

多くのことで心を騒がせ、人を見て不満を抱きやすい私たちを、あわれんでください。

マルタのような熱心と責任感を持ちながら、マリアのように、主の足もとに座ってみことばに聞き入る者とならせてください。

「多くのこと」ではなく、「ただ一つ必要なこと」を私たちの生活と信仰の中心において歩むことができるよう、聖靈さま、導いてください。私たちの主イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン。